

かがやき №34

oshima hospital
select menu

医療法人敬仁会
函館おしま病院
訪問看護ステーションおしま
R6.7.10



「コロナ禍を超えて」

2020年から世界はコロナ禍により一変しましたが、ようやくこの1年でこれまでの日常を取り戻しているように思います。とは言え、未だに発熱など風邪症状のある人が身近にいると緊張感を強いられています。病院では引き続きマスク装着を義務付けていますので、患者さん・ご家族と職員双方がお互いの表情を読み取ることが難しいですし、また職員間においても新職員はマスク姿のお顔しか知りませんし、旧職員もマスクを外した時の顔が記憶から薄れています。このウィルスの影響はまだまだ続きそうですが、当院としてもマスクの止め時を見計らっているところです。

2023年5月に5類移行となつてからは、入院患者さんの面会を全てフリーとしましたが、大きな問題無くこれまで経過しております。さらに少しずつ休止していた活動を再開しま

したが、まず7月からは月1回の遺族茶話会を始めました。この遺族茶話会にはホスピス開設以来参加されている方からつい最近参加し始めた方もおられ、故人のことを振り返ったり、お互いの近況を話したり、一緒に音楽等を楽しんだりと、ご遺族の方々だけでは無く、私たちにとても癒される大切な時間となっております。

次に今年4月からボランティア活動を本格的に再開していただきました。コロナ禍の間もお花やオブジェなどを飾っていたが、活動は継続してくださいましたが、今回さっそく喫茶コーナーや配茶サービスが始まりました。ボランティアの皆さんの活動は、日頃単調になりがちな患者さんの入院生活の中に社会の風を吹き込んで下さいます

が、やはりこれまでより患者さんやご家族が笑顔で過ごされる場面が増えていと感じています。ボランティアの方もこの4年間でさまざまな事情により登録者が減りましたので、今後、募集するための講習会も再開しようと思っております。

6月1日には私たちが関りを持たせていただき1年間に逝去された患者さんのご遺族にお声をかけ、追悼会も開催しました。第1部は思い出のスライドショー・水島千鶴子さんのハーブ演奏、第2部は茶話会という流れの中、共に語り、涙して、故人のいのちを感じながら一緒に温かいひとときを過ごさせていただきました。最後は感謝の意をこめて職員・ボランティアによる歌で送り出し、皆さんとは笑顔で再会を約束しました。苦しみが強ければ強いほど、それを乗り越えた時の喜びは大



きくなり、また前へ進む時の力も強くなるのだと思います。このコロナ禍で私たちは多くの時間や物を犠牲にして来ましたが、そこから得たものも大きいように思います。決してこのウィルスに感謝することはありませんが、これまで以上に「人との繋がり」や「命の尊さ」を考える時間となったことは確かです。

名誉院長 福徳雅章

「リクエスト食」



栄養課では今年の2月からリクエスト食を始めました。思い出は視覚・聴覚・味覚・触覚により想起されるものです。

食事を口にして人生の楽しかった・嬉しかったという思い出で心を満たして頂けるようお願いを込め取り組みました。

毎月患者様が誕生した日付の前後で提供できるよう、一週間前から聞き取りを行い準備しています。提供メニューは和食・洋食・中華・麺類・デザートをご用意しています。すぐに食べたいものを出せない方のためにもメニュー表を用意し、皆様楽しみながらご覧になっています。食を通して明日はこう過ごしたい・今度はあれが食べたい、と患者様が生きる目標を持つことができるよう今後とも支えて参ります。

エピソード

ある患者様はリクエストにうなぎを選択し、笑顔で召し上がっております。次回は誕生日だからお寿司が食べたいねと、次回のリクエスト食も大変楽しみにされていました。それから1か月、少しずつ咀嚼と嚥下が難しくなり食事形態が柔らかいものへと変化されていきました。お寿司を食べることは難しいのでは、病棟でも不安の声がありました。そこでなんとかお寿司を柔らかくして食べて頂きたい。担当看護師と栄養課はやわらかお寿司を計画しました。シャリは軟飯を使用し、ネタは刻んだお刺身を見えるや大きな口を開けて「はやく食べたい」と言わんばかりの前のめり。美味しいよと大きくうなずき、「ありがとう」と素敵な笑顔がみられました。やわらかお寿司提供以前はやや活気が落ちてきておりましたが、その日を境に活気を取り戻し食欲も回復していきました。患者様の元気な姿に私たちまで元気を頂きました。食事の持つパワーを栄養課ともども驚かされました。



エピソード2

ある患者様は入院日の翌日が誕生日でした。通常リクエスト食は1週間前から栄養課がリクエストを聞き取り、準備を行っています。しかしお誕生日は年に1度の大切な思い出になる日。実は入院される1週間前から入院支援看護師がリクエストをうかがっておりまして。そして栄養課まで伝えられるリクエスト。そのリクエストはちらし寿司でした。当日はあまり食欲のない患者様のために、小さくてかわいいケーキのようなサイズでちらし寿司を提供しました。「すごい！きれい！」患者様からの素敵な笑顔と一緒に写真もパチリ。栄養課の提供するお食事が、患者様とご家族の大切な思い出の1ページになれば私たちも嬉しい限りです。

管理栄養士 荒川夏海



当院では、これまでもお誕生日にお祝い膳をお出ししており患者さん・ご家族からはとても喜んで頂いております。

素敵な器にきれいに盛り付けられた食事が患者さんの生きる力に繋がると考えていた前任管理栄養士の竹中さんは、なんとか入院患者さん皆さん全員にお祝い膳を提供したい一心で「生まれた日」をハッピーデーにすれば毎月お祝い膳で楽しんで頂けると考えました。

また、わたしたちがそうであるようにたくさんあるメニューの中から選ぶことはとても心が躍ります。「初デートの時にピザを食べた」「土曜日の昼にお母さんが作ってくれたチャーハン美味しかった」。家族や大切な方との幸せな記憶を想起して頂きたいという願いを込めて和食・洋食・中華・デザート全5ページにわたる豪華メニューブックを作り、6月現在までに約30食を提供できました。

竹中さんは5月で異動され現在は荒川さんが後を引き継ぎました。荒川さんは竹中さんの想いをしっかりと受け継ぎ、食を通して患者さんご家族のQOLが向上するよう日々尽力中です。

看護部長 谷口葉子



Sさんとの出会いは、まだ雪が降る今年の1月下旬でした。

肺癌と診断され、ご本人やご家族の選択で積極的治療せず、緩和ケアを希望しておしま病院へ繋がった方です。

最初から自ら告知を受け、前病院の聞き取り調査から「なるべく自宅療養し必要があれば入院したい」を選択し、おしま病院緩和ケア内科外来を受診しました。既に呼吸状態不良で酸素飽和度が低下しており在宅酸素を開始、同時に状態観察・緊急対応目的で訪問看護が導入となりました。

初回訪問は訪問看護師3名とケアマネージャーで伺い、玄関を開け赤く長い階段を上り左側の部屋で長女さんと少し硬めの表情で出迎えてくれたSさんを鮮明に覚えています。髪や髭が伸び、体調すぐれない中で身の回りの事が出来にくくなっている状況が見えました。それでも会話を進める内に私たちスタッフへ徐々に慣れ、在宅酸素を開始してからは呼吸苦が軽減し室内移動や会話が楽になった、と現状を多弁に語ってくれました。

長女さん、孫さん（女性）と3人暮らしで日中は二人とも仕事の為ご本人のみ。訪問時はノートで娘さんと情報の共有をしました。訪問開始当初から「もう、

「今年は桜見れるかな」



死んでいいんだ。」

「みんな（娘さん、孫さん）に迷惑かけたくない。」とスピリチュアルペインの言葉が聞かれ真摯に傾聴し、Sさんが安心して在宅で過ごせるよう支援させてもらいたいと伝えました。

3月に入ると病状の進行で呼吸苦や倦怠感が増し、徐々に外出や病院受診が困難となりました。ご本人へ訪問診療について説明し勧めると「大丈夫。唯一の外へ出れる時間だから行くよ。」と答えました。安らげる自宅で自分らしく過ごし、長い階段を座りながら一段ずつ降り長女さんの運転で病院へ向かう道並木や建物、そして空気を楽しめる貴重な時間だったのだと思います。しかし、少しの移動でも負担が強くなり中旬には訪問診療へ移行しました。

ある日の訪問中テレビで本州の桜が映り、ポツリと『今年桜見れるかな』と話しました。毎年娘さん達と五稜郭公園へ桜を見に行ってたそうです。ある日、訪問時に近所で買った満開の早咲き桜を持参すると「早めの花見だなく飾って」と嬉しそうに話し皆が見れる台所へ飾りました。

（桜とパチリ。『桜と俺』）

「俺は今まで仕事を転々としてきて、今ここにいて悔いがない。最後まで家にいたい。一人で死んでも良いから。」とこれまでの歩みと共にこれからの望みを語り、主治医やご家族へ『最期を自宅での思い』を伝えケアマネージャーと共に環境の調整と連絡方法を考え進めていきましたが、状態が更に変化し在宅生活への不安強くなり自ら入院を希望しておしま病院ホスピス病棟へ入院しました。

入院後酸素・薬剤調整し症状緩和する中、訪室し大好きな飲酒や入浴ができる話すと「本当か？」目を輝かせ喜んでた姿は忘れません。その後、入浴後のビール、喫茶でビールなど楽しみ「入院して良かったよ。楽になったしお酒も飲めるしな。」と笑い、ホスピス病棟イベント花見の前日には「明日、花見行くとてよくまさか信じられないよな。今年は2回目の花見だな。」とやや粗めの呼吸で嬉しそうに話してくれました。

入院22日目、病棟スタッフ（訪問看護師も参加）と一緒に函館公園へ行きお花見。ビールに焼き鳥、みそこんにゃくを買い車内で食べたそうです。ほろ酔い

気分が帰りの車内で「生活史」を存分に語りながら病院へ戻りました。

（桜とパチリ。『寒桜と俺』）

その3日後ご家族に見守られ旅立ちました。

入院することで一度は外出を諦めたSさん。ホスピス病棟へ入院しても好きな事ができ、外出が出来たことは、素敵な思い出になったのではないかと思います。

Sさん桜満開の中で、大好きな『島津亜矢さん』の歌を聴き楽しんでますか？

訪看おしま 澤田美佐子



「優しい柔軟剤の匂い」

旅立ったAさんが入院されていた病室には、可愛らしいお花や赤い実をつけたサクラランボの枝が飾ってありました。毎朝、会社へ行く前にご主人が自宅の庭で、かつては二人で育てていたお花をお持ちになります。仕事帰りには、「今日も穏やかな顔をしているね。また来るよ。」とおやすみと挨拶され帰路につかれます。

その夜、Aさんは優しい表情で目を閉じ眠りについた後に静かに息をひきとられました。病室に到着されたご主人とご子息がAさんとの別れの時を慈しむことができるよう、そっと見守ることにしましたが、気になって病室を訪ねてみました。「看護師さん来てくれて良かった。男3人で湿っぽくしているのはダメだね。」と、色々なことをお話ししてくださいました。「女の人ってすごいよね。ご飯作って掃除して洗濯して子育てして。妻が入院してからは僕も洗濯するようになったけど大変だなんて思うよ。」「妻が使っていたのと同じ柔軟剤使っている。匂いって覚えていたから嬉しいかなと思ってね。」「さくらんぼは自分たちより鳥に食べられるために手をかけているようなものだったけど、それでもいいよねって2人で話していたよ。」

わたしたちには聴く・見る・味わう・嗅ぐ・触れるという感覚が備わっていて、思い出は感覚とともに記憶されます。懐かしい音楽、懐かしい食べ物、懐かしい景色に再会した時、わたし達は幸せな思い出に包まれます。

この先、ご主人は洗濯物の優しい匂いでAさんと過ごした幸せな日々を思い出すのかもしれませんが。そして毎年6月には、鳥になってAさんがご主人の居る庭先にさくらんぼを食べに来てくれることでしょう。

優しい柔軟剤の匂いは、ご主人とAさんを繋ぐお守り。

ホスピス病棟看護主任 古村千保





「癒し癒される心からの医療」

040-0021

北海道函館的場町19番6号

医療法人敬仁会

函館おしま病院

TEL 0138-56-2308

FAX 0138-56-2316

訪問看護ステーションおしま

TEL 0138-30-7287

FAX 0138-56-2317

web <https://www.oshima-hp.or.jp>

Instagram <https://www.instagram.com/oshima.hp/>

